

日本医学会分科会活動報告

学会名(No. 042 ) 日本アレルギー学会

代表者名 理事長 海老澤 元宏

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

学術的に特に重要と考えられる活動として、年1回開催している学術大会が挙げられる。例年5000名以上の参加者があり、教育的なプログラムに加え日本語および英語での一般演題のセッションを設け学術の発展の場としている。学会誌として和文誌の“アレルギー”並びに英文誌である“Allergology International 誌 (AI 誌)”の発行が挙げられる。前者は教育的な役割を担い、後者は国際的な情報発信の場として重要である。AI 誌の2022年の impact factor は6.8 と、アレルギー領域で第6位に位置付けられており、国際的にも高く評価されている。

b. 当該領域における国際的な役割

本学会は World Allergy Organization (WAO) や Asian Pacific Association of Allergology, Asthma and Clinical Immunology (APAAACI) に所属し、European Academy of Allergy and Clinical Immunology (EAACI) やドイツアレルギー学会(DGAKI) とともに MOU を交わし国際的交流を行なっている。具体的には相互にそれぞれの学会において Sister Society Symposium を開催している。さらに、中国アレルギー学会、韓国アレルギー学会の3カ国合同で、East Asia Symposium を持ち回り形式で開催している。本学会の理事長が WAO の理事長を2020年～2022年まで併任し現在は前理事長として活動しており国際的なプレゼンスが高まっている。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

平成26年に成立したアレルギー疾患対策基本法に基づき、アレルギー診療に携わる人材育成、並びにアレルギーに関する情報周知を目的として、総合/臨床アレルギー講習会の定期的開催、アレルギーポータルサイト整備事業などを推進している。令和3年度はアレルギー疾患対策指針の改定にあたり当学会の理事長が厚生労働省のアレルギー疾患対策推進協議会の座長を務め尽力した。アレルギー総合ガイドライン、喘息予防・管理ガイドライン、アトピー性皮膚炎診療ガイドライン、アナフィラキシーガイドラインなどのガイドラインやアレルギー免疫療法の手引きや分子標的治療の手引きなどを発行して、アレルギー診療の指針に貢献している。厚生労働省の委託事業としてアレルギー相談員養成研修会を毎年開催しアレルギー疾患対策に貢献している。

#### d.学会運営上留意している点

本学会は内科、小児科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科、基礎医学など多数の領域にまたがって会員が所属しており、アレルギーという共通言語に基づいて各領域の理解を深め相互の交流を図るよう配慮している。

#### II.日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載して下さい。

日本皮膚科学会と共同してアトピー性皮膚炎ガイドラインを作成するとともに、同学会、日本小児アレルギー学会、日本眼科アレルギー学会、日本皮膚免疫アレルギー学会、日本職業・環境アレルギー学会と共同してアレルギー総合ガイドラインを作成している。また、アレルギー疾患対策基本法に基づき日本小児アレルギー学会、日本皮膚科学会、日本眼科学会、日本呼吸器学会、日本耳鼻咽喉科学会、日本免疫学会と合同で免疫アレルギー研究10ヶ年計画を策定した。